



群馬県コンクール 金賞

お米と日本とぼくの歴史

沼田市立升形小学校 6年 峯川 晴

「ねえ、イッセキって何?」「イッコクとかイチゴクのことを言ってるの?」

学校でお米についての発表会があったとき、ぼくは特に興味を持ったお米の単位について家族と話をした。一つの石と書くその言葉は、イッコクとかイチゴクと読むそうだ。調べてみると、お米の単位にはいろいろあることが分かった。1合はご飯2杯分。1升は10合で、一升瓶にお米が詰まっているくらいの量。一斗は10升で一斗缶くらいの量。一石は100升で、湯船くらいの量。その日ぼくは一石の量を想像しながらお風呂に入った。翌朝、ご飯一杯分が何粒か調べようとしたけれど、50粒数えたところで断念した。50粒で1.8グラムだったから、4千粒くらいかな。食事のたびに、4千粒ものご飯を食べているぼくは、お米でできているようなものだ。

いつも、不思議に思っていたことがある。

「ご飯粒を残すと目がつぶれるよ」と言われることだ。めん類やパンだって残すと言われるけど、お米は何だか特別扱いされている気がする。

疑問が解けたのは、歴史の授業中だった。弥生時代に入ったところで、稲作が始まった。おじいちゃんのそのまたおじいちゃんのときよりも前から、お米が日本の暮らしの中に根付いているんだと思うと、人生の先ばいのように感じた。奈良時代になり、租庸調という制度ができた。税金のような制度で租はお米で納めるものだ。そのことを習ったとき、ぼくは思わず息をのんだ。そうか。昔、お米はお金の代わりだったんだ!だから今でも特別なんだ。調べてみるとお米の元となる「稻」から「値打(稲打)」などの言葉が生まれたこともわかった。他にも、ききんで苦しんだ時代もあることや、戦争の時には、白いご飯はとてもぜいたくなものだったということも学んだ。「ご飯粒を残すと目がつぶれるよ」という言葉には大切なものを粗末にするなという強い思いがこめられているように感じた。

ぼくの初めての離乳食は重湯だったと聞いた。おかゆの上澄みの液体だ。それから10倍粥に進み、だんだんとふ通のご飯を食べるようになったらしい。小さい頃、よくかぜをひいたぼくは、そのたびに母の作るおかゆを食べた。今でも体調を崩した時には必ず食べたくなる。ぼくの歴史はまだ短いけれど、赤ちゃんの頃から、お米とともに生きてきたんだなと気付いて、より一層親近感を覚えた。

去年の稲作体験では、長い時間お世話をしてやっと思えるお米と、お米作りをはじめとした農業をしている人たちへの感謝の気持ちが芽生えた。そして、今年、歴史を学んだことにより、古くから日本人の暮らしがお米とともにあったことを知り、これまで以上にお米が好きになった。これからも感謝の気持ちを忘れずに、大好きなお米をたくさん食べたいと思う。